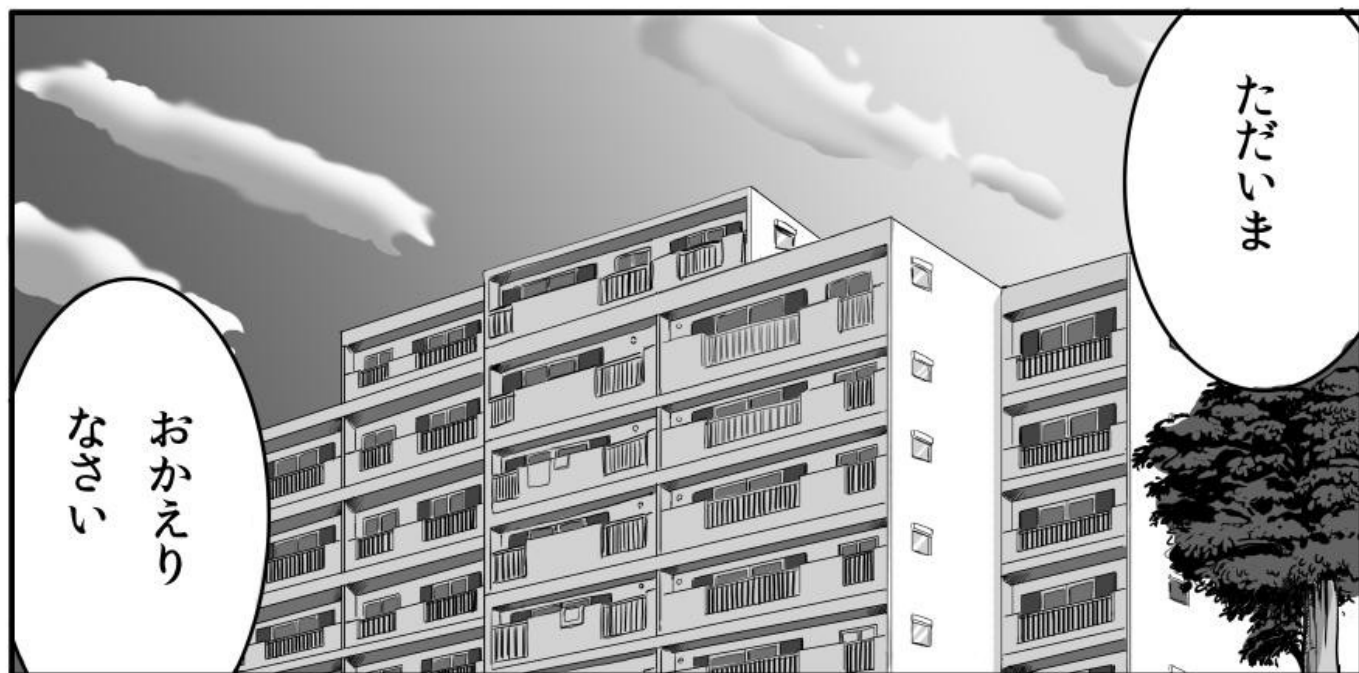




ただいま

おかえり
なさい

へんばくのあとで

EDMOL : 作

僕らは
いつも
すれ違う



今日は
大丈夫だった？



うん
なんとかね…

早く
ご飯を
済ませましょ



あれが
やってくる前に…

言葉が
交わせる間は
幸せだ



話せる時間が
短いからこそ
積み積みもった
会話も弾む



だけど、それも
長くは続かない――



もう
きたみたい……

早いね
大丈夫？



念のため
薬を飲み増そう

大丈夫じゃ
ないかも……









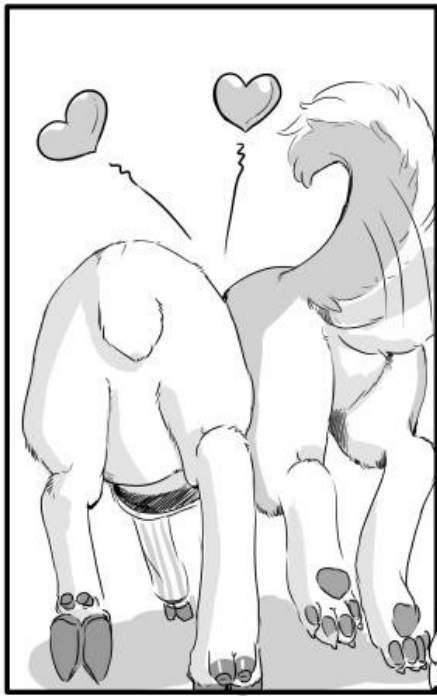
僕らは
こうやって
毎晩
獣の姿で
夜を過ごす

こうなると
もう言葉は
通じない



だから
もう
慣れっこだ





薬が効いて
朝までには
元の姿に
戻る

チュン...

チュン...

チュン...

チチチ...

今の僕らは
毎日を
こんなふうに
暮らしていた

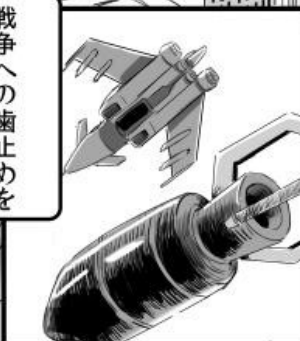


世界のどこかで
開発されたという
生物の姿を
変えてしまう技術



それは
何も壊さず
誰も殺さない
人道的な兵器という
触れ込みで

戦争への歯止めを
失わせ



たちまち
世界を
一変させた



人々は
それを
『ヘンバク』
と呼んだ

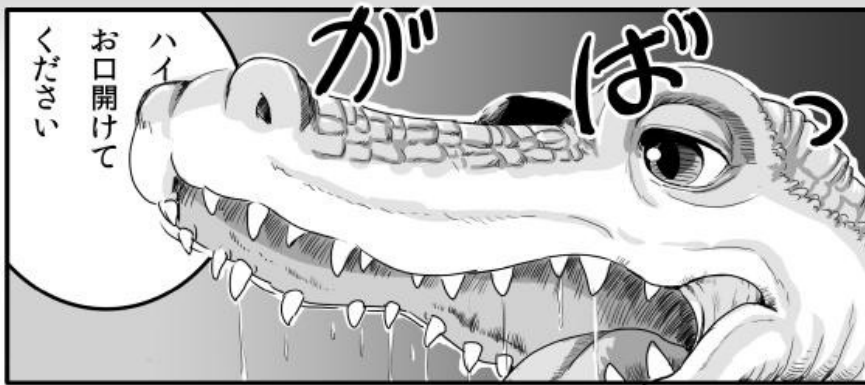


その後
同様の兵器
による
応戦が続き…

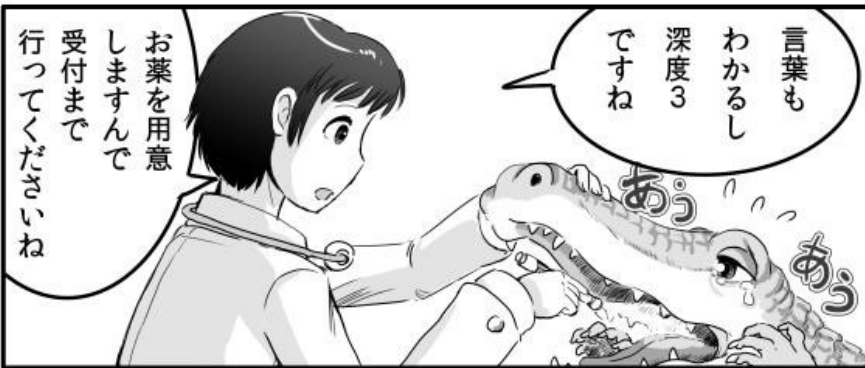
気がつけば
人間のほとんどは
『ヘンバク』
による
病を持つに
至った…



それから
数ヶ月経ち
僕らには
これが日常に
なった



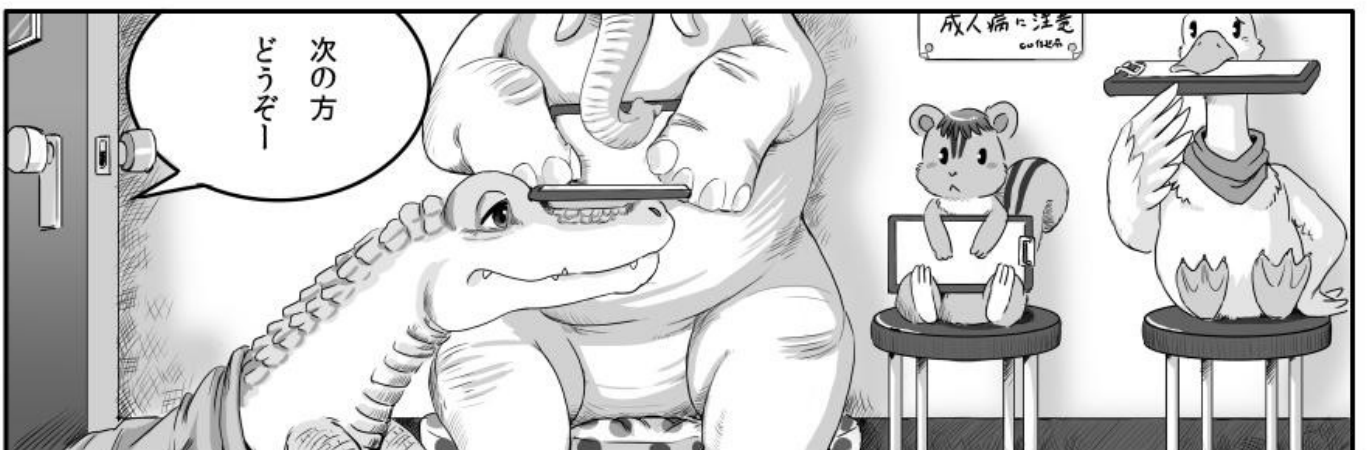
ハイ
お口開けて
ください



お薬を用意
しますんで
受付まで
行ってくださいね

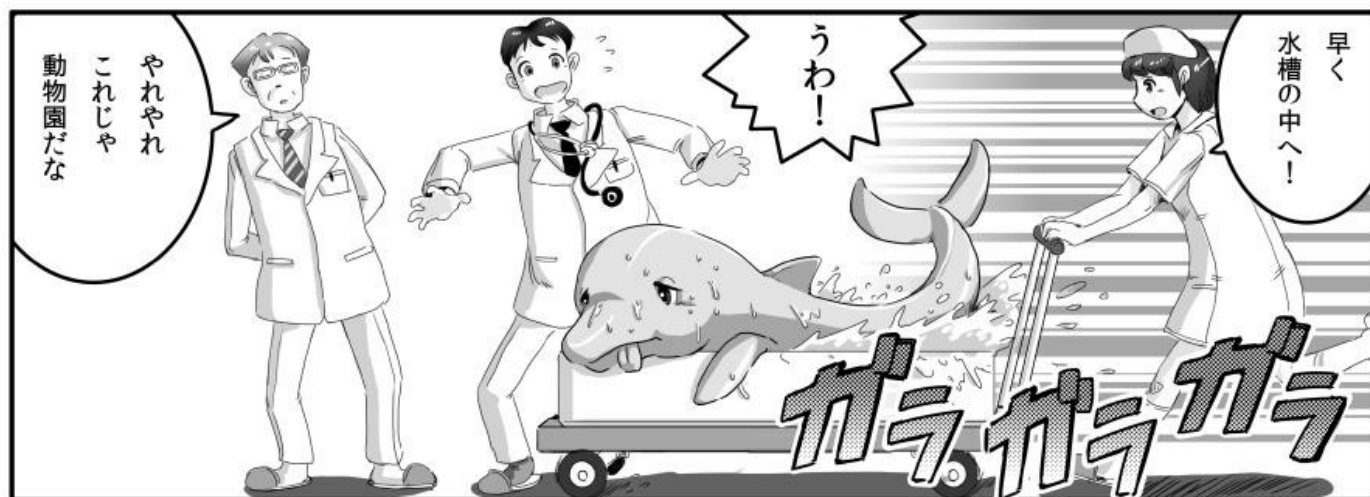
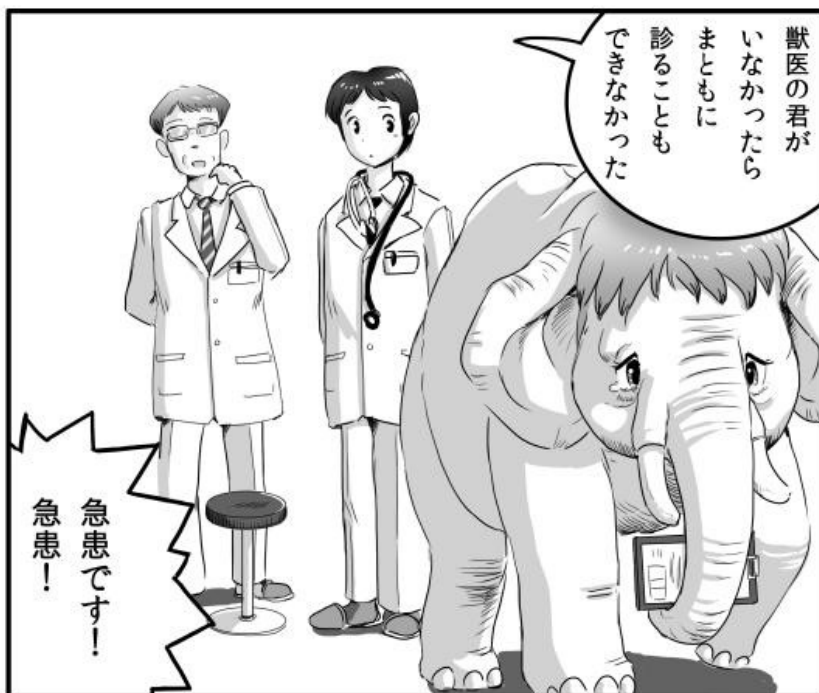
言葉も
わかるし
深度3
ですね

あう
あう



次の方
どうぞー

成人病に注意
caution











それから
僕は
彼女に
この事実を
話した――



なんだか
申し訳なかった



彼女は
納得して
笑ってみせたけれど

その笑顔は
少し寂しげで



その夜
僕らは
激しく
交わった

なぜやりで

乱暴で



あんなにも
考えないで

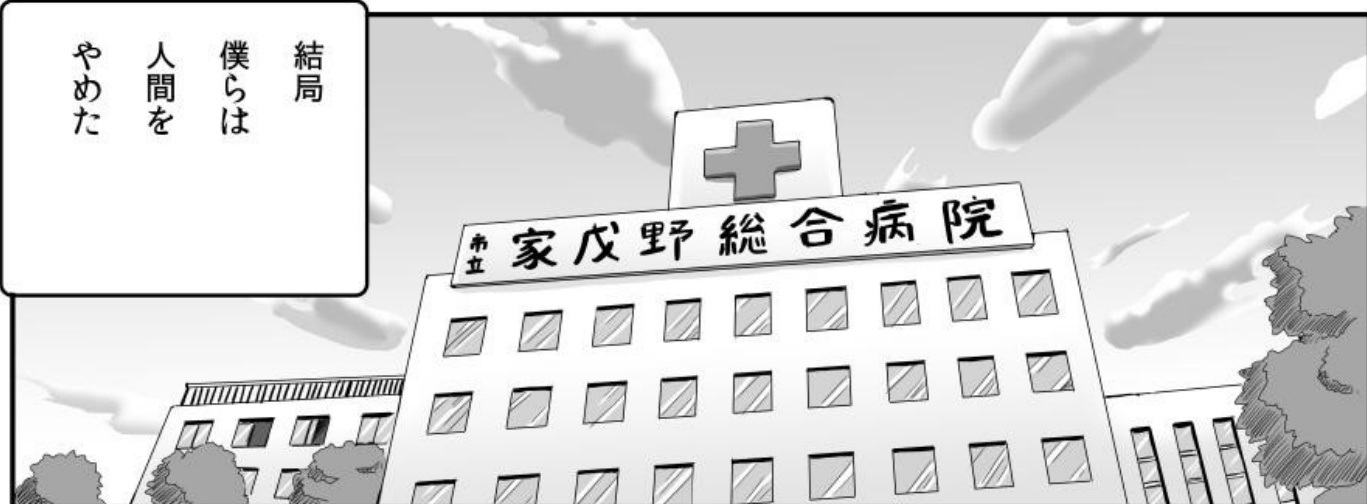


何も生むこともなく
僕らはすれ違い
やがては冷めて
離れていつて
しまうのだろうか…

そう思うと
空しくて
ただむしように
明日が怖かった



結局
僕らは
人間を
やめた



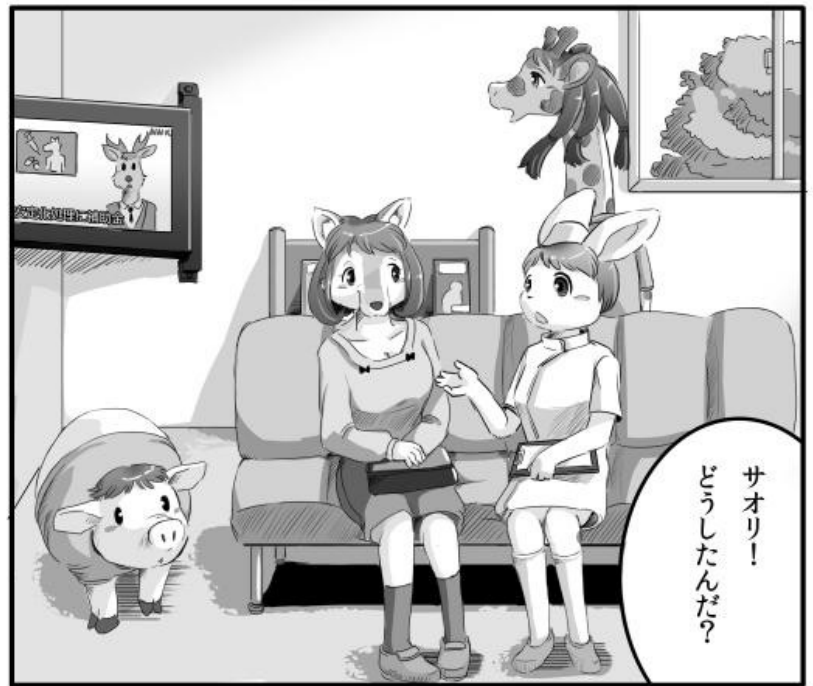


同じようで
違う
毎日が

そして
僕らの日常が
また始まった





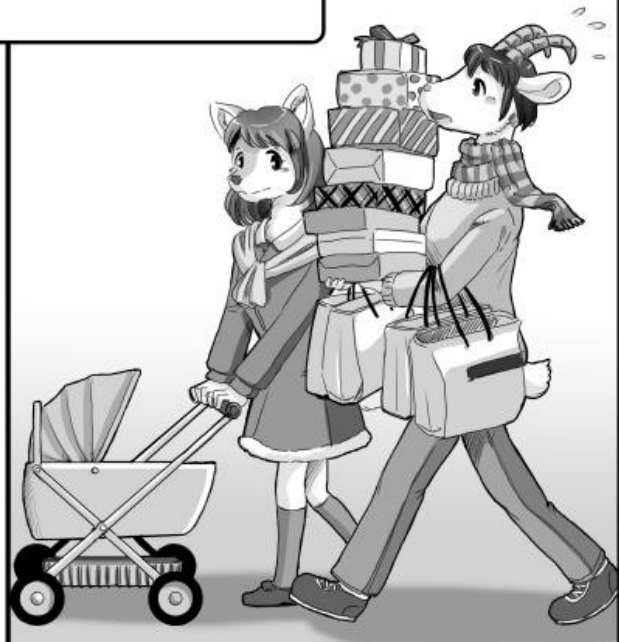




それから半年後
彼女は無事に
僕らの子を
出産した



それから
忙しくも
楽しい日々を
過ごしている



僕らは
共に
ここで
生きていく



おしまい

